

【小刷り】

朝日新聞本紙西部本社 11月27日 14版 1 県福岡A 【箱】 11月27日「多良岳のオレンジベルト」写真は語る  
内部ID:N202211250063262 kmztm7081(8613196)

# 「オレンジベルト」夢切り開く

## 佐賀・多良岳の「黒酢みかん」生む

Memory  
写真は語る



「オレンジベルト」。佐賀、長崎県境にある多良岳のふもとに広がる一帯のみかん畑はそう呼ばれる。1960年〜80年代、国や県の整備事業として傾斜地に一気にみかん畑ができた。

ベルト地帯は、主に国が1964（昭和39）年度から鹿島市と太良町にまたがる計629軒を、県が73年度から順次、同町の大浦・太良両地区の計約430軒を開拓した。

国が開拓を始めた直後の66年元旦の朝日新聞佐賀版は「豊かな郷土へ」の見出しで、唐津城の復元や玄海町の原発建設とともにオレンジベルトを取り上げ、「ブルドーザーの高らかな音がこだましている」と期待の高まりを伝えた。

それから五十余年。太良町に最盛期で1500戸ほどいたみかん農家は、後継者不足や高齢化で500戸近くまで減ったが、知恵と工夫で経営を成功させた農家もいる。大浦地区で約20軒のみかん畑をもつ農業法人かねひろ社長川崎豊洋さん(53)だ。

高校卒業後、農家を継いだ。農業の知識もなかった。農家らでつくる研究会に参加し、黒酢アミノ酸で土の微生物を活性化させる栽培方法を試行した。7年連続で赤字の時期もあった。農家をやめようかと悩んでいた2015年、町が始めたふるさと納税の返礼品に出すと驚くほど売れた。

栽培方法が確立した「黒酢みかん」をブランド化して商標登録し、全国有数の売り上げを誇る。通販や直販店などにも経営を広げ(64)はいう。2人は最近、新たに高値で取引されるシヤインマスカットの栽培に取り組み。「夢の持てる農業を」。共通の願いだ。

(村上英樹)



●多良岳の傾斜地を開墾し、オレンジベルトの整備が進む  
11月21日、佐賀県太良町、本社機から  
●大規模経営を手がけ、ブランド「黒酢みかん」を生産する川崎豊洋社長(左)と佐賀県太良町大浦